

史料室だより No.10

東洋英和女学院史料室委員会
発行 1980年11月6日

< 創立96周年記念特集号 >

青楓寮、法人本部（元宣教師館）、東光会館（元幼稚園）閉館式

1980年7月7日 4:30 p.m.

於 法人本部

式 次 第

司式 ダフニ・ロジャース

礼拝招詞

さあ、われらは拝み、ひれ伏し、われらの造り主、主のみ前にひざまずこう。詩篇95:6

讃美歌 2番 一同

聖書朗読 中野登美子

詩篇 100篇

へブル人への手紙12:1-2

お 話 光明 照子

ロジャース

祈 禱 ロジャース

中野登美子

頌 栄 540番

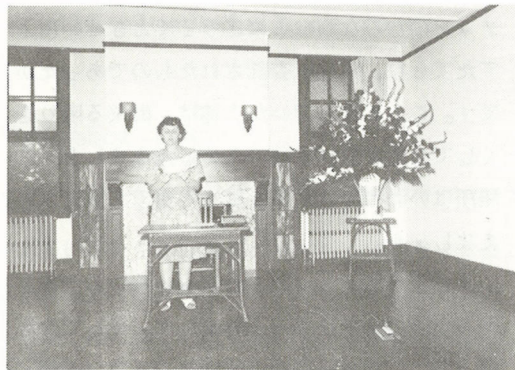


お 話

院長 光明 照子

すでにご承知のとおり、創立100周年を近く迎えようとする学院の将来の発展のため、この度、長い間鳥居坂2番地の名で親しまれた土地と旧宣教師館（現法人事務所）、青楓寮、東光会館を手放すことになりましたので、閉館式にあたり、私はこの三つの建物の歴史を短かく述べたいと思います。

これらの建物は第二次世界大戦の火をくぐりながらもそれぞれ50年に近い歴史をもち、多くの人々の心にさまざまな思い出を残すものであります。1900年に建てられた校舎、寄宿舎、宣教師館を一つにした古い木造建物を創立50周年を記念してそれぞれ独立したものに改築することに



なり、校舎の改築に先立ち1932年に宣教師館と寄宿舎と幼稚園がこの土地に新築され、幼稚園舎の2階には婦人ミッションの伝道活動のために専用の設備も出来ました。

宣教師館は一室がカナダメソジスト教会婦人ミッションの事務所に当てられた他は東洋英和で教える宣教師と直接伝道のために働らく宣教師10名前後の方々の宿舎でした。

戦時中には一時軍に使用され、戦後は米国やカナダの教会から派遣された若い男女の教師や宣教師の宿舎にあてられたりしましたが、やがて戦後の世界情勢の変化とともにミッションの方針も変わってその活動の主力は日本以外の地域に向けられるようになり、日本に派遣されて働らく宣教師の数も減り、したがってこのような宿舎の必要はなくなり、1970年9月にはカナダミッションから学院が宣教師館とその敷地を譲り受けました。

1972年から76年まで石井次郎院長はここに生まれましたが院長交替に伴ない院長宿舎にあててをせず法人事務所がここに移りました。

幼稚園は戦後、小学部とともに新しい校地に移転し、2階も戦前のような伝道活動には使用されなくなり、やがてこの建物は1・2階とも東光会が利用できるように取計らわれて今日に至りました。

青楓寮と新しく命名された寄宿舎は、ある時代には現在の短期大学保育科の前身である幼稚園師範科の教室に大部分を当てたりし、最近短期大学の学生寮となっていました。いろいろな形をとりながらも、50年に近い歳月にわたって学院の教育の一環をになった場でありました。

それぞれの時代にふさわしく学院のために用いられたこれらの建物と土地が形は変わっても将来の学院の教育の充実に用いられることを喜び、そのために祈りたいと思います。

お 話

ミス・ロジャース

今日、ここに集まっていられるみなさまお一人お一人が、この建物について色々な思い出をもっていらっしゃることとおもいます。私にもなつかしい思い出がかずかずございます。

この場所は、私共宣教師が日本に参りましたときに始めて住んだ家でした。ですから、特別なしみをもった場所なのでございます。ここですごしました頃の事をおもい出しますと、感謝の気持ちでいっぱいになります。先ばいの宣教師のせんせい方は、若い、新しい宣教師一人一人のことを深く心にとめてくださいました。そして心のこもったしどうをして下さったのです。

私自身、この場所のことを考えます時、特に感じが深く思い出されますのは、ここで経験いたしました家庭的な雰囲気のことです。私達は同じもくてきのために集っておりましたので、みんなの心が一つになっていること、一人一人がこの家族のだいじな一員であることを実感いたしました。ともに祈り、仕事にはげみました。また、いっしょに泣いたり、笑ったりした事もありました。

また一方、ある意味では、この家は私達のものではないという気持ちもしておりました。といえますのは、このたてものは、日本とカナダのクリスチャンのなみなみならぬどりょくときせいによってたてられ、私達に委託されたものであったからです。ここに住んでいた人達は、出来る限りを尽くして日本の若い人達のために働きました。この場所はいわばキリストを証する場であったとも云えましょう。

年とともに、ここにおいてもいろいろな面で成長と発展のすがたがみられました。そして今私達は、新しい成長と発展の時期を迎えています。今

二 番 地

When I heard that the property at 'Toriizaka nibanchi' had been sold and that the buildings there were being demolished this summer, my first feeling was one of sadness. The senkyoshikan had been my home for many years, and as I thought of it, memories came flooding over me.

I remember especially the day when I arrived in Japan — September 5th, 1936. I was on the Empress of Canada with Miss Douglas, who was returning to Japan after her first furlough. Miss Courtice met us at Yokohama and brought us to Tokyo and to nibanchi by taxi. I was given the small south-east corner room on the third floor, overlooking the garden which, I was told, had been so planned that some tree or flower would be blooming in every season. (One was the old plum tree, to which, it was said, someone connected with the 47 Ronin had once tied his horse.)

In a few days I started language study, also some teaching at Toyo Eiwa High School, where Miss Hamilton was then principal. I attended classes in the morning, and studied in my room most afternoons. I can close my eyes now and imagine I am there, feel the warm, bright September sun pouring through the windows and hear the sound of the semi in the garden. What busy, happy days they were, as I experienced the excitement of entering into the life of Japan!

Many other memories come crowding into my mind. One very special one was my return to Japan and to the senkyoshikan in 1948, after the War. How grateful I was to be able to renew old friendships and to make new ones!

So the busy weeks and years passed quickly. My senkyoshikan memories include our morning worship together, Bible Study and English groups, Christmas parties, Mission meetings, broken water pipes, and a broken arm! Yes, the senkyoshikan at nibanchi was my home and the home of Canadian missionaries for many years, and even when it no longer exists physically I feel that in my heart it will always be home to me.

September 1980

Mildred E. Matthewson.

~~~~~

や新しいかたちの設備が必要になって参りました。うか。このたてものを建てられた方達が信仰をも私達に与えられたあたらしい challenge の時とって前進なさったように、私達も私達の主イエスして深く考えなければなりません。新しいきかい・キリストの足跡をたどりつつ、前に向かって進んと責任が神様からあたえられたのではないでしょ、でまいりましょ。

東洋英和女学校 幼稚園・伝道部 起工式  
 寄宿舎・教師住宅

二 番 地 雑 談

中野 登美子

昭和六年一月十四日(水) 午後三時  
 鳥居坂町二番地 新購入地

順 序

司式 藤岡 牧師

- 一 式 辞 司 式 者
- 一 讚 美 歌 131
- 一 聖書朗読 平岩 恒保 氏
- 一 祈 禱 全 氏
- 一 起工之儀
- カナダ合同教会婦人伝道会社代表
- ミズ・コーテス
- 東洋英和女学校長 ミズ・キニー
- 全 後援会代表 清水 由松 氏
- 全 同窓会代表 塩原 千代子 姉
- 全幼稚園母の会代表 山下 静子 姉
- 全 伝道部代表 島田 さと子 姉
- 全 寄宿舎代表 酒井 廣子 姉
- 一 建築経過報告 ヴォーリス 氏
- 一 請負者紹介
- 一 頌 栄 462
- 一 祝 禱 マッケンゼー氏



学校の帰り道、鳥居坂の通りを三河台(ロアビル)の交差点まで来ると、暮れかかる東の空をバックに、奥の方から、青楓寮、宣教師館、(元)幼稚園の建物が並ぶ。「まだあるナ」とおそるおそる横目で見遣ると、此の三つの建物にまつわる思い出がふと蘇える。一番手前の幼稚園、私はこの卒業生ではないけれど、此の建物が出来て以来永年の間主任をしていらした福島寿美江先生は、もう亡くなられたが、私の母と同級生で、クラス会などに連れられて行くときよくお目にかかったものだ。「よくいらしたのね」と必らず声を掛けて下さる。幼稚園の先生だと知ったのは大分あとのことだった。そのあと、私共の一級上の根本さんのお母様になられて幼稚園をお引きになってからは、私たちより二年あとの高橋千恵子さんが主任になられたと思う。此の方の御父君は軍人さんで、遠足の時にはよく(当時は常に全校遠足であった)軍服で見送りにいらして、全生徒を前に拳手の礼をなさり、「高橋チイの父であります。皆さんどうぞよろしく。元気でいらっしゃい」と丁寧に挨拶をなされた事が忘れられない。

次の宣教師館と云えば、ミス・コーテスのお美しい笑顔が浮かぶ。ピカピカの西洋館に一步入ると、ここはもう日本ではないのかと疑う位。独特な、ケーキの様な香り、素適な階段、ガラスのドア。広々としたパーラーに招き入れられると、いやが上にもお行儀が良くなる。かしくまって西洋の先生の御入来をお待ち申し上げる、という段取りである。さて、一とたびこの先生がお口をお開きになると、何と、立派な日本語である。母には英語でお話しになるが、子供である私には、聞き馴れた叔母たちと同じ様な日本語なので又もや、

「あゝ、私はどこにいるのだろうか？」という戸惑いを覚える。こうして暫らくの時を過ぎた後、Good bye! というお声をあとに玄関を出ると、深呼吸をして振り返ったものだ。

青楓寮は加茂先生のお城であった。こちらは余り御縁がなくて、寮生活をして見たいナ、と思いながら卒業してしまった。

戦争が終り、懐かしい母校に招かれて再び鳥居坂に通うようになった。戦災で家をなくした私は、生れて初めて下宿生活をするようになった。就任して間もない或る日、長野院長先生によばれて、「あなたはどうせよその家から通っているのだから、青楓寮に来て住んではどうか」とお話があった。「実は、今までの舎監の先生がおやめになったのだが、小さい生徒たちがヤンチャで、(元来、青楓寮は主として保育科生のためのものであったが、戦争の影響で家が遠くへ疎開してしまった低学年の者も七、八名混っていた)一日も放置しておけない状態にあり、副舎監の鎌倉ヒルダさんが一人で手を焼いているから、一緒に副舎監として協力するように。食事の方は鎌倉さんがするから、あなたは女学科の生徒の方をよく見るように。」との御命令であった。私は、エレミヤではないけれど、年は若いし、経験もない事で、とんでもないと思ったのですが、そこは昔のこと、院長の御命令とあれば有難く拜命である。早速引っ越しという事になったが、当時のことで車の手配など望むべくもない。(なけなしの自動車という自動車は進駐軍に調達されていた)焼け出されて大した荷物もないのだが、思案に暮れていると、ヤンチャと云われた二、三年の寮生たちが祐天寺の下宿から炎天下を歩いて引っ越しの荷物を運ぶ手伝いをしてくれたのである。忘れ難い感激である。

ヤンチャと云われる生徒たちは、新任の若僧の教師は組し易しと思ったのであろう、何かと話の

中に入れてくれたので、意外と気軽に寮生活に溶け込んで行く事が出来た。すぐに発見した事は、私より若いヒルダさんが、大きなお釜をかき回しながらおみおつけを作ったり、雑炊を煮いたりして食事の準備をなさる。どこからともなく、「〇〇ちゃん、おテツよ!」という叫び声が聞える。数人の生徒たちが降りて来て、黒い四角い木のお盆を銘々の食卓に置き、お箸をそろえたり、食器を並べたりする。仲々手際が良い。「おテツ」とは「お手伝い」の事であった。食後には食後のおテツがある。ヤカンや食器を洗い定位置にしまうのである。その間にヒルちゃんが明日のお弁当の支度を始める。小麦粉にフクラン粉を混ぜて溶き、ちょっと味をつけて一人一人のアルマイトのお弁当箱に公平に流し入れる。大鍋に水を入れ、シューマイの様にセイロを使って蒸すのだが、約五十人分のパンを蒸し上げるのには夕食後二時間では足りない。勿論、時にはトウモロコシの粉であったり、コーリャン入りの赤い御飯であったりする。これが毎晩繰り返される。朝は五時前に起きて朝食の支度である。私はそのエネルギーに圧倒された。しかしこれを黙って見過すわけにはいかない。(あとで分った事だが、先年退職なさった山崎まつさんが、買い出しやらその他万端、黙々として縁の下の力持ちとなっていて下さった。)何の役にも立たないけれど、そばで見ていた位の事は出来るだろうと、生徒たちの自習時間が終ると、下に行って、ウロウロし始めた。幾晩か経って少しづつ手を出す。そのうちに、無いよりましかと思って、家から持って行った電気天火を出して来て焼いて見る。何とか使える。一度にお弁当箱が二つしか入らないけれど、一と晩に六人分位は焼ける。だんだん馴れて来ると、油断して居眠りが出る。ヒルちゃんと替わる替わる居眠りをするのだが、或る時、「アッ!大変!」というヒルチャ

んの声に目を醒ますと、部屋中 濛々たる煙である。何よりも、明日のお弁当が二人分、真っ黒焦げである。騒ぎを聞きつけて部屋から降りて来たヤンチャ娘たちが、「私たち、分けて食べるからいいわ」と事も無げに云った。クラスの友達に分けて貰うのかしら。ただでさえ足りない僅かな蒸しパンのお弁当である。食べ盛りの子供の思い遣りに、涙の出る思いであった。それから何日か、パン焼天火の焦げ臭いにおいは誰かのお弁当箱に移り香となってしまった。ヤンチャと云われた人たちも、新米のへまな副舎監には手加減をしてむしろ協力してくれた。又、当時の保育科の学生は大層おとなで、低学年の人たちに文句もつけず、時にはたしなめたり、小さいのに親許を離れていることだからと大目に見てくれることが多かった。今はそれぞれ立派な、幼稚園の先生として活躍して居られる方々である。

こうして夏休みを境に、川尻知恵先生がれっきとした舎監として着任された。実に抱擁力があり、冷静で何事にも動ぜず、深山の様な御人柄であった。「そーお、あゝそーお」とゆっくり話を聞いて頂くと、大抵の事は解決するようであった。私も漸く御役御免となり、退寮する筈であったが、先生から「そんなにあわてて出て行かないでいいでしょ」と引き止めて下さる御言葉に甘えてその後も暫らく寮生活を続けさせて頂いた。クリスマスパーティ、卒業生とのお別れ会など、貧しい食糧事情の中で知恵を傾けて献立を考えたり、病人の心配をしたり、青楓寮での一年余りは、私の英和に於ける生活の中で独特な一と駒として印象づけられている。

## 寄 宿 舎 規 則

(明治十七年設立申請書より)

- 一 校則ニ掲ケタル条目ヲ守ルハ勿論、諸事幹事之指揮ヲ受クベシ
  - 二 晨起就寝喫飯浴湯等ハ堅ク其時限ヲ守ルベシ  
但シ時限ハ日ノ長短ニ拘ラス左ノ如ク定ム  
晨起ハ午前六時就寝ハ午後十時トス  
喫飯ハ午前七時、正午、午後六時トス  
浴湯ハ生徒ノ等級及就業ノ都合ニ依リ其時制ヲ定メテ幹事ヨリ命ズ
  - 三 高声ノ音読及嬉戯雑談等ヲナシ他人ノ勤学ヲ妨ル事ヲ禁ズ
  - 四 金銭衣服類貸借スベカラズ
  - 五 務テ身体及室内ヲ清潔ニスベシ
  - 六 寝ニ就ク時灯火ヲ滅スベシ
  - 七 外来人ヲ自室ニ誘引スルヲ禁ズ  
但シ用談ハ必ず応接所ニ於テスベシ
  - 八 飲酒喫煙ハ勿論品行ヲ害スル書籍ヲ禁ズ
  - 九 外出ハ休業日ト雖モ許サズ  
但シ事故アリテ外出ヲ要スル時ハ保証人ヨリ幹事ニ許ヲ請フベシ、父母疾病ノ如キ至急ヲ用スル時ハ此限ニアラズ
- 東洋英和女学校  
高等女学科学則  
(昭和七年十二月二六日改正  
昭和九年四月三十日一部改正)
- 第十四条 保護者ノ家ヨリ通学スル者ノ他ハ本校寮舎ニ入舎スルヲ要ス  
但シ特別ノ事情アルトキハ右以外ノ通学ヲ許スコトアルベシ
- この他に、22条からなる寄宿舍規定が別に定められている。

~~~~~  
— あ と が き — ミス・マシューソンの二番地の思い出は、二番地と漢字で書いて下さいました。光明院長のお話は、当日原稿を史料室だよりの為に書き直して下さいました。ロジャース先生のお話は、英文のと日本語のと両方いただきましたので、日本語のを原文のままにのせました。創立96周年特集として、歴史の一コマの終了を迎え感慨無量です。(中・高部 中野・沓沢・朽木)